

## 第22回 やまなし留学生スピーチコンテスト報告 胡 晨さん 印傳屋賞入賞！

特定非営利活動法人大学コンソーシアムやまなし・やまなし留学生スピーチコンテスト実行委員会主催の「第22回 やまなし留学生スピーチコンテスト」が、2025年12月6日(土)に開催されました。今年度のテーマは「つらぬきたい自分らしさ」でした。

山梨県内の大学からは、山梨学院大学5名、山梨県立大学3名、山梨大学2名、山梨英和大学1名、都留文科大学1名、身延山大学1名、計13名の留学生が参加しました。参加者の出身国はモロッコ、インド、マレーシア、モンゴル、韓国、中国と多岐にわたり、各自が5分以内のスピーチで日本語能力・構成力・表現力・発想力を競い合いました。なお、一位・二位・三位の上位三賞は、山梨学院大学の留学生2名、山梨大学の留学生1名が受賞しました。

本学からは、昨年度に続き、胡 晨さんが出場しました。今回のスピーチでは、小学校の国語授業における「木のように生きたいか、川のように生きたいか」という問い合わせに始まり、長野・上諏訪での出会い、船の上で手渡された「われなぐさ」の花、山梨県内の食堂の店主との交流、能登半島でのボランティア経験など、多くの「旅の記憶」を紡ぎながら、「ただ流れ続ける川」であった自分が、人との出会いを通して「立ち止まり、根をおろしたい」と願うようになった心の変化を、映像的で詩情に満ちた言葉で語りました。聞く者的心に静かに広がるような、情景深く物語性にあふれたスピーチとなりました。

今回、胡 晨さんは副賞の「印傳屋賞」を受賞しました。審査では、胡 晨さんのスピーチの「流れるような構成」「自然で柔らかな語り口」「物語としての完成度」が高く評価されました。

スピーチ終了後には、留学生同士の親睦を深める交流事業として、今年は日本の正月遊びである羽つきが行われました。会場は笑い声と声援が響き、非常に和やかで活気に満ちた時間となりました。

コンテスト終了後、胡 晨さんは次のように言葉を寄せてくれました。「どうしてもこの物語を伝えたかったので、これこそが、私の『つらぬきたい自分らしさ』だと思っています。入賞の順位にこだわりはありませんでした。むしろ、印傳屋賞という素敵な賞をいただき、とても嬉しく思っています。支えてくださった先生方、そして出会った皆さんのおかげで、私の『川』の旅はさらに豊かになりました」と。

胡 晨さん、印傳屋賞入賞、本当におめでとうございます！今後のさらなるご活躍を心より期待しています。



▼スピーチ原稿

「川のように歌い、根を下ろす」 胡 晨（身延山大学仏教学部仏教学科 2 年）

小学校の国語の授業で、先生はこう尋ねました。—「君は木のように生きたい？それとも、川のように生きたい？」

教科書の中で、木は一箇所にとどまり、夏には木蔭を与え、冬には風を防ぎ、土地を守る。川は、生まれた時からずっと歌い流れつづけ、世界を巡る。

「もちろん、川だ」と、私は答えた。「旅が好きだから。」

私は旅人であります。止まることが嫌だ。

川のように、雨や雪となり、森や村へとおりていく。また四方八方の道をたどりながら、

空と海を目指す。私の過ぎ去る場所は、すべて私のきおく。この目で見たものだけが、私にとっての「ほんとう」だった。

三年前、私は上諏訪に住んでいた。そこで農家の梨恵さんに出会った。

春、彼女と、諏訪湖の氷が神さまの通り道になったかを、話した。

夏、ひまわりに、指先で笑顔を描いた。

秋、私たちは田んぼのあぜに座り、彼女は彼岸ばなの意味を教えてくれた。

冬、私は温泉で、「こんなこと言うのは良くないけど、夏目漱石の『坊っちゃん』みたいに、温泉で泳ぎたいです。」と言った。梨恵さんはすごく笑った。

ある日、彼女は私を舟に乗せた。急に、かいをこぐ手を早めると、舟はきしのくさむらへつっ込んだ。草をつかみ上げた彼女の手には、青い、小さな花が咲いていた。

「この花、「わすれなぐさ」っていうんだ。」

「ここを離れても、私のことを忘れないでね。」

一忘れるわけないだろう。私はその花をじっと見つめた。

どうして忘れられるだろう。

ここ山梨に来てから、私はわかった。人は、思っていたより多くのことを忘れていく。ときに、必死に思い出そうとする。

家の近くの食堂の店長、雨宮さんは、もう年を取っていた。彼はすぐに、私を「昔からの客」だと思い込んだ。

「いつもオムライスを頼むお客様なんだね」と。

でも、違う。最初はカツ丼で、二度目は昨年のスピーチコンテストで賞を取ったお祝い。一番高いエビフライ定食だった。

その後、私はずっとオムライスだけを頼むようになった。

今年の十月、ボランティアとして能登半島の輪島に行った。そこで祭りの手伝いをした。

子どものころ、地震で、なにもできなかつた私が、誰かの力になれた。

祭りの終わりに、私は初めて太鼓を叩いた。太鼓のこどうが胸に深く響いた。

身延でよく目にする「みんなに笑顔を」と書かれた標語の意味が、その時初めてわかつた。大切なのは—私たちが出会い、話すこと。笑顔を見たら、私たちは笑えばいい。

笑顔さえあれば、力になれるんだ。

私はもう、ただの川ではいられないと思った。なぜなら、誰かが、私を覚えてくれる。誰かが、いつも微笑んでくれる。私の旅も、ただ流れ過ぎるのではなく、出会った人々のためにちょっと立ち止まりたい。私が訪れた場所に、私は根をおろしたい。

そう考えると、これこそが私の望む本当の川ではないか。  
たとえ曲がりくねっても、ずっと流れ歌い続け、その願いにより、巡った場所を潤し、  
やがて広がり、強くなっていく川だ。

◆指導：桑名法晃・伊東久実  
(報告 白景皓)